

ローカル なものと 文化資源

弘前大学
山田 巖子



はじめに

BORO 2009年から2019年まで浅草にあったミューズミュージアムで展示された田中忠三郎のコレクション展示がきっかけで、脚光を浴びる。

藍染め、手仕事、つぎはぎの妙が世界的に人気に。
「人に見せるものではない」と言われたものがファッションへ

森山 エ「文化資源の考え方」（内堀他 2007）
「文化資源」においては「〈資源〉である」ものを新たな意味で「〈資源〉にする」行為が重要
（内堀基光・菅原和孝・印東道子編『資源人類学』2007年財団法人放送大学教育振興会）

横田尚美「服と生きる、ファッションと暮らす」安井眞奈美 エルナンデス・アルバロ編
『神体の大衆文化』2021年 kadokawa

はじめに

「文化資源」とは何か

内堀基光「資源の問題群の構成」（内堀他 2007）の整理。

- 1 環境のなかのあるものが人間にとって役立つもの、つまり資源とみなされるかどうかは人間の評価によって決まる。
- 2 人間の欲求と能力のあり方は社会によって、あるいは歴史的な変化によっても異なる。
- 3 資源は人間の欲求を満足させるように働くという点で機能的である。

また、欲求と能力は環境によって影響、制限を受ける。その意味で資源の在り方と人間の欲求、能力は相互に関数的に変化する。

はじめに

「文化資源」の管理

民俗芸能の管理.....（俵木2015）はコモンズの概念を導入

コモンズ.....複数の主体が管理する資源や、その共的な管理・利用の制度（管2008）

参考：入山権、入浜権

俵木悟「「護るべきもの」から学ぶべきことー民俗芸能研究のフロンティアとしての無形文化遺産」『民俗芸能研究』59号 2015

管 豊「環境民俗学は使用と利用をどう考えているか？」山泰之他編『環境民俗学ー新しいフィールド学へ』2008 昭和堂

はじめに

姜竣【シンポジウム「ローカルなもの生き延び方ー現代
における人形儀礼の再文脈化」】「シンポジウムの概
要」日本口承文芸学会編『口承文芸研究』42号 2019年

関根康正

敗北したローカリテイ

西洋近代型の近代化や世俗化に押し流されて命脈を
絶たれ解体されつつあるもの

勝利するローカリテイ

ローカルな生活世界をも市場化する状況の中、グ
ローバル市場に通用するようにパッケージ化された
もの

（関根編『ストリートの人類学』下巻 2009年 国
立民族学博物館）

はじめに

勝利するローカリティ

復古的な色調をもったさらなる近代化

その輝きの前にますます身を隠されてしまうローカルな生活文化
(姜竣「シンポジウムの概要」日本口承文芸学会編『口承文芸研究』42号 2019年)

- * グローバリズムの中で、他者との出会いを通して、自分たちの文化から新たな「意味」や「価値」を「発見」していく時代。
- * 「文化資源の活用」が「ローカルなもの」を滅ぼし、「パッケージ化されたもの」の形成に与するものにならないために

1「文化 資源活 用論」 の授業 と論点

国立歴史民俗博物館製作 『AINU Past and Present-マンローのフィルムから見えてくるもの』（2015年）を「文化資源」の観点から鑑賞

ニール・ゴードマン・マンロー（1863－1942）

- ・ 1891年来日1930年（昭和5）アイヌの熊送りの映画を撮影 日本の東京オリンピック社とイギリス王立人類学協会の映画委員会で再編集される

内田順子「メディリテラシーを育む－アイヌ文化に関する映像を中心に－」内田順子・川村清志『歴史研究の最前線』18号「メディリテラシーを育む」2016 総研大 日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館

1「文化 資源活 用論」 の授業 と論点

学生たちの「ひっかかり」

「資源となり得るもの」の消滅
の問題

「資源となり得るもの」の保持
集団と外部との関係の問題

「資源となり得るもの」の正統
性の問題

「資源となり得るもの」の評価
／解釈の問題

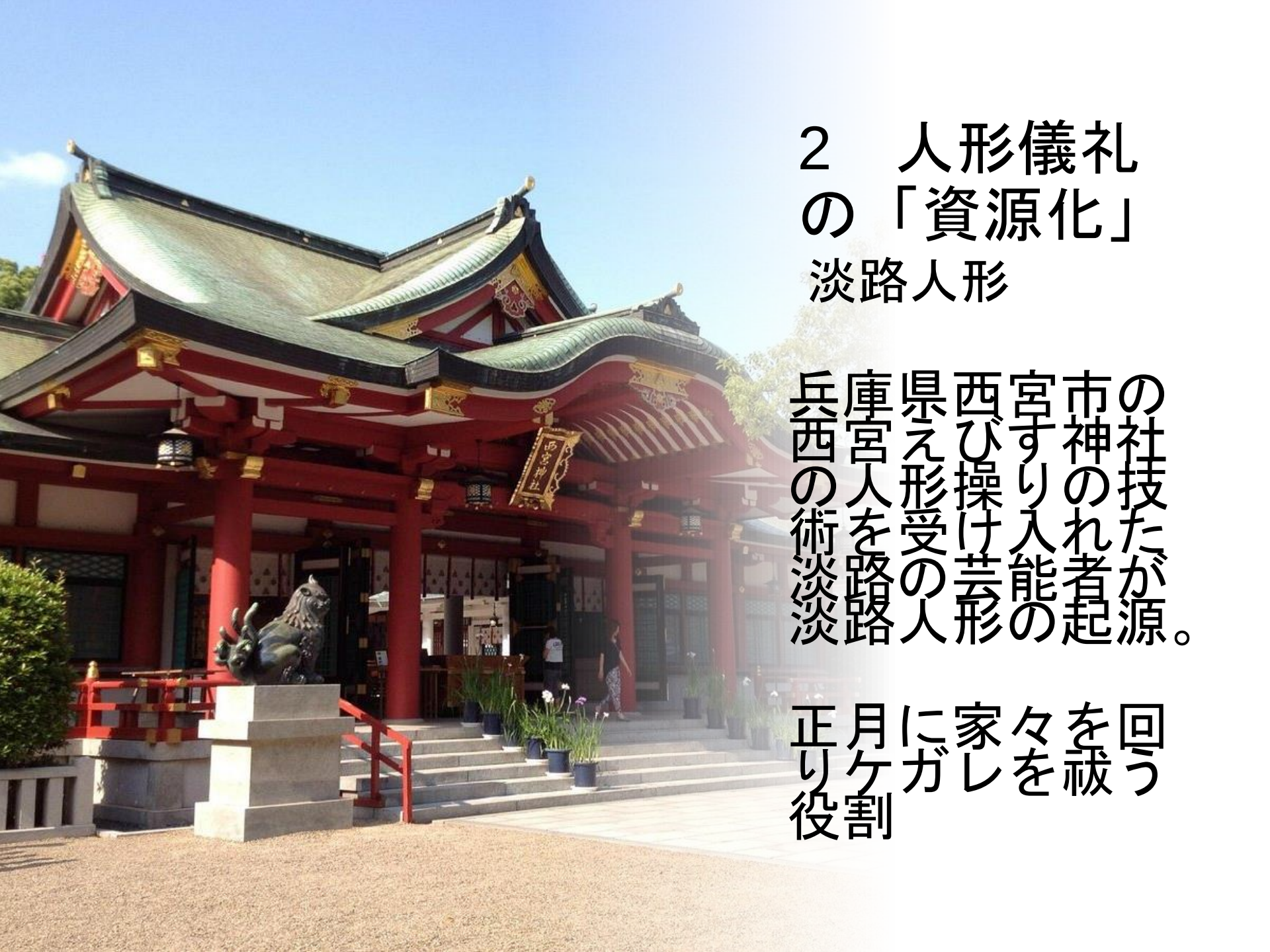
「資源となり得るもの」の活用
の広がりと加工の妥当性

1 「文化資源活用論」の授業と 論点

「資源となりうるもの」の活用主体の正当性
「資源になり得るもの」の表象化の恣意性の問題

- 「資源となり得るもの」の所属の妥当性

撮影されたアイヌの人々を疎外した形で映画が
享受され、流通したこと、アイヌの人々以外の
人々の「資源」であったことへの批判



2 人形儀礼 の「資源化」 淡路人形

の社技たが源。
市神のれ者起
宮すり入能の
西ひ操け芸形
県え形受の人
庫宮人を路路
兵西の術淡淡

回り
を祓
々を
家し
にガ
月ヶ割
正り役

2ー① 経験としての ノスタルジア

淡路人形の「戦後」

(『神舞い人形—淡路人形伝統の生と死、そして再生—」原題Puppets of Nostalgia 2012年 訳・出版 齋藤智之)

- 1950年 文部省 全国郷土芸能大会企画
- 1957年 全国郷土芸能大会に淡路人形が招かれる
人形芝居の上演
観客のほとんどが外国人
観客の一人モスクワ博物館館長からの招待
- 1958年 モスクワとレニングラードで上演
- 1976年 重要無形民俗文化財に指定

2-① 経験と としての ノスタル ジア

ローによる淡路島での聞き書き
人形浄瑠璃と区別された「三番叟ま
わしとエビス廻し」ジェーン・マ
リー・ロー（『神舞い人形—淡路人
形伝統の生と死、そして再生—」原
題 Puppets of Nostalgia 201
2年 訳・出版 齋藤智之）

伝統のそのような「みっともな
い」側面にばかり興味を持つことが
残念だ

2ー① 経験としてのノスタルジア

「複雑な帰属意識を持つ人形遣いの子孫」
喪失の経験

淡路人形芝居の復興を支えた経験者たちの想い
「経験としてのノスタルジア」

↓
かつての担い手の手を離れ「淡路の伝統」へ
歴史の忘却／隠蔽

（ジェーン・マリー・ロー『神舞い人形—淡路人形伝統の生と死、そして再生—』2012年 訳・出版 齋藤智之）

2-② イデオロギーとしてのノスタルジア

戦後 伝統文化の喪失感、民俗学運動の高まり

↓ 1950年

文化財保護法成立 〈戦前 「史蹟名勝天然記念物保存法」(1919制定)・国宝保存法(1929)・「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」(1933制定)〉

＋無形文化財・埋蔵文化財・民俗資料

元来、懐旧に伴う痛みを意味するノスタルジアという感情は、物理的场所としての故郷を喪失すると時間上の過去を指しつつ憧憬へと変わり、地理と歴史を交換可能なものにする。

2ー② イデオロギーとしての ノスタルジア

郷土芸能の復興と観光化

1970年 デイスカバー・ジャパン
「日本の過去を取り戻す運動」

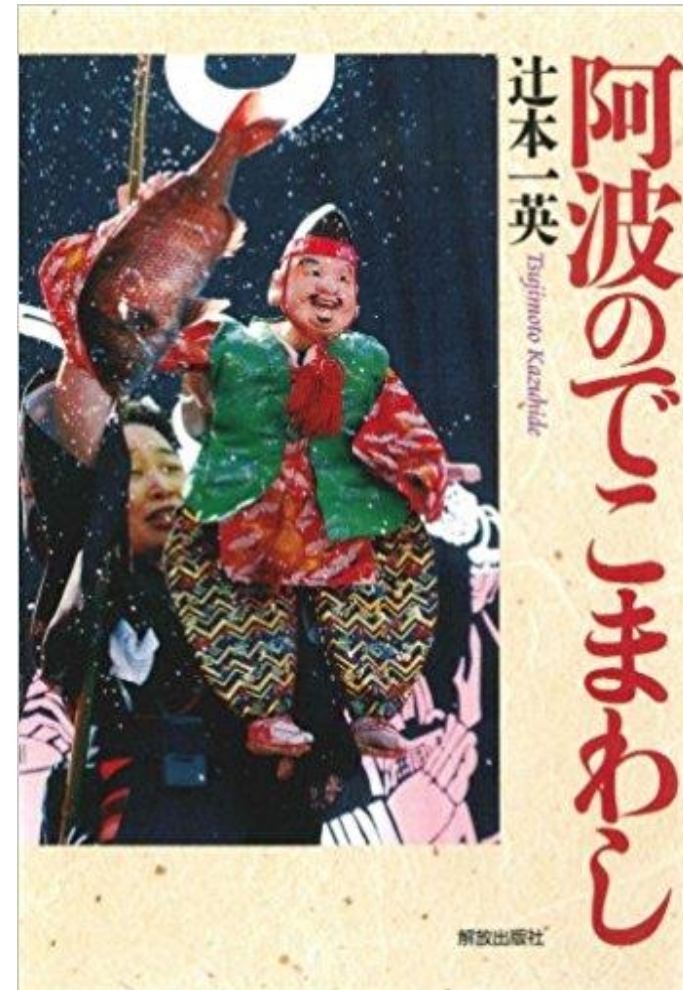
1975年 文化財保護法改正
民俗資料から民俗文化財へ
ツーリズム
「イデオロギーとしてのノスタルジア」

(ジェーン・マリー・ロー『神舞い人形—淡路人形伝統の生と死、そして再生—』2012年 訳・出版 齋藤智之)

2-③ 「抵抗／解放」としての「伝統」 の再文脈化

徳島県の阿波の箱廻しの「復活」
辻本一英の挑戦
「被差別」の「痛み」から

辻本一英『阿波のでこまわし』
2008 解放社
姜竣「阿波木偶の伝統と被差別民の漂泊性」（関根 2018）



徳島の風景

うだつ



民家



箱廻しの箱と恵比寿人形



2—③

「抵抗／ 解放」と しての 「伝統」 の再文脈 化

1970年代初頭に徳島県西部でおきた結婚差別による心中事件。徳島市内の被差別部落で同和教育と解放運動を模索

地域の「ばあやん」たちからの聞き取り

1990年代半ばから地元で消滅したえびすまわしを復活する動きが始まる。

1998年に最後の三番叟まわし芸人と出会い、その翌年に弟子入り

(辻本一英『阿波のでこまわし』
2008 解放社)

2—③ 「抵抗／ 解放」と しての 「伝統」 の再文脈 化

迎える側 ノスタルジア

再生させた側 差別の克服と「伝
統」の継承・復活／新たな活動の場
「被差別の経験」とともに次世代に
伝える「語り」

（辻本一英『阿波のでこまわし』
2008年 解放社）

（姜竣「スティグマのシンボルから
アイデンティティのアイコンへー「マ
レビトの地理」が導く歓待の問
いー」『口承文芸研究』42号
2019年）

2-④ 「文化財」制度と箱廻し

- 1979 「高校生友の会」結成
- 1995 徳島における祝福芸・門付芸等の無形民俗文化財の調査研究を目的として、保存会が発足。
- 2006 徳島新聞賞『文化賞』受賞
- 2009 保存会会長、徳島県『阿波文化創造賞』受賞
ユネスコアジア文化センター『ACCU賞』受賞
「阿波木偶の門付け用具」（163点）が
国登録有形民俗文化財に登録
- 2015 阿波木偶「三番叟まわし」が徳島県無形民俗文化財に指定
- 2016 顧問が奈良県大和郡山市第4回『水木十五堂賞』受賞
- 2017 サントリー『第39回サントリー地域文化賞』受賞

2ー⑤

「文化財
化」の陰
で忘れら
れてゆく
もう一つ
の「門付
け」

森田良成「門付けの「継承」
と「復活」のはざまで一阿波
徳島「三番叟まわし」の再興
ともうひとつの記憶」『口承
文芸研究』42号 2019年

「簡単な言祝ぎ」「こまいお
人形」の恵比寿舞、大黒舞

* 「ローカルなもの」の主流
化と周縁化

3 廃館した博物館の旧蔵資料をめぐる 活動—小川原湖民俗博物館の活用に向 けて

『小川原湖民俗博物館と祭魚洞公園』1989年 ギョウセイ



2015年8月30日博物館跡



3ー① 小川原湖民俗博物館の沿革

1961年開館 2004年に経営破綻／老朽化のために2015年 4月20日廃館



3-①-1 小川原湖民俗博物館 の廃館後の取り組み



『小川原湖民俗博物館と祭魚洞公園』 1989年 ぎょうせい

2015年4月18日、19日民具移設に集 まった市民と学生



移設されなかった民具 現在は三沢市へ



弘前大学寄託民具保管室 民具607 穀物
サンプル・生薬・標本 4 2



民具整理にあたる学生たち



3-②旧蔵資料の整理から

長尾正義・古川実・山田巖子・小島孝夫「民具の保存管理の現状と課題」神奈川大学日本常民文化研究所編『民具マンスリー』48巻12号
(2016年3月) 資料保存のための方法の意識化

旧蔵資料の「価値」の再定義



博物館史的意義／地域史的意義／地域住民的意義

- ・「民具」の文化財化以前の蒐集
- ・他所者の郷土史家＋他所者の実業家＋（郷土の学芸員）

思惑の違い

3-②旧 蔵資料 の整理 から

多様な媒体の資料群

映像資料の充実の背景

創設者の杉本行雄（1913—203）

渋沢栄一の書生、渋沢敬三の秘書

実業家に転じ1951年に十和田観光電鉄の取締役（のちに社長）に就任

鉄道と観光地と博物館の構想（十和田湖の入口としての三沢）

博物館構想と関わる渋沢敬三の人脈

中道等・杉本行雄「原始」や「古代」を彷彿とさせる小川原湖の風景への憧憬

3-③博物館構 想とその時代

1953年 十和田湖畔に十和田科学博物館を開館 カルデラを中心とした自然博物館

渋沢敬三の提案

当初の杉本案は民具博物館

民具展示に関わったのが宮本馨太郎（1911-79）（岡田一男「映像史における渋沢・宮本フィルムの価値とその保存」宮本瑞男他編『甦る民俗映像』2016）

小川原湖民俗博物館も渋沢の当初案は総合博物館

渋沢敬三揮毫の看板「小川原湖博物館」



民俗資料収蔵台帳

No. 4 17

* ノ項ハ記入シナイデ下サイ。

* 収蔵番号

* 分類番号

* 地域民族

* 収納棚

* 収蔵年月

原 名

訳 名

標準名 着物 (女兒用)

採集地 岩手県盛岡市富士見町 10の4

採集年月

採集者

寄贈者 森口 多里

採集経過

購入価格

製作地

製作者

製作年月

製作法



昭和 37 年 7 月 30 日 3,000

立教大学民俗資料室 (ハ)

立教大学民俗資料収蔵台帳

民俗資料収蔵台帳

No. 4 16

* ノ項へ記入シナイデ下さい。

* 収蔵番号
* 分類番号
* 地域民族
* 収納棚
* 収蔵年月

原 名
訳 名
標準名 着物 (女児用)

採集地 山女田 成田之内 1074

寄附者 堤 藤太郎

譲入価格

油草 (カバー)
綾目とひびきでワタエ村
カバー

和服

9

民俗資料収蔵台帳

No. 4 17

* ノ項へ記入シナイデ下さい。

* 収蔵番号
* 分類番号
* 地域民族
* 収納棚
* 収蔵年月

原 名
訳 名
標準名 硯箱

採集地 青森県上北郡八幡
集年月
集者
譲過

寄附者 森田 正作

譲入価格

昭和 36 年 7 月 27 日

10.

民俗資料収蔵台帳

No. 2 ~ 1

* ノ項へ記入シナイデ下さい。

* 収蔵番号
* 分類番号
* 地域民族
* 収納棚
* 収蔵年月

原 名
訳 名
標準名

採集地
集年月
集者
譲過

寄附者

譲入価格

10. 3,000

(A)

3-②博物館構想とその時代

日本で最初の民俗博物館実習

1962年度と1963年度の立教大学博物館実習

博物館の民俗資料整理

仮台帳をもとに民俗資料収蔵台帳・民俗資料附票・民俗資料基本カードなどを作成

附票添附・民俗資料の測定・収蔵台帳と基本カードへの記入・写真撮影

『mouseion－立教大学博物館研究』
No9立教大学博物館講座 1963

『mouseion－立教大学博物館研究』
No10立教大学博物館講座 1964

3-③博物館構想 とその時代

1962年度科学研究交付金
「日本在来民具の民族学的研究」
（代表 宮本馨太郎）

竹内利美、野口武徳、森口多里、
中道等などが名を連ねる

中道等の仮説

上北地方はアイヌ、ツングース
等が渡来して狩場の生活文化相
を形成したと仮定、異民族と土
地の民俗、自然現象の消長など
を調査したい（1951年 渋
沢敬三宛書簡）

3—③博 物館構 想とそ の時代

「民俗」復元の間としての移築
民家

実験的な博物館

1967年3月16日のオシラ
ホロギ撮影会

4人のイタコを招く

先行する渋谷敬三（1934
年）、岡本太郎（1964年
『神秘日本』）らのオシラホロ
ギ撮影

年中行事を民家で再現して撮影
いずれも八戸の郷土史家小井川
潤次郎を介す

渋谷敬三の十和田科学博物館開館挨拶のレコード



渋谷敬三の葬儀と一周忌の映像



3—③博
物館構
想とそ
の時代

25の映像資料

2種類の音声資料

生業と食物が充実 制作
過程の記録

学芸員 桜庭俊美の撮影
によるものが多い

小川原湖民俗博物館の民
具は映画にも活用

黒澤明「乱」／寺山修司
「田園に死す」

3—③

「発見」された青森県の 「文化資源」

従来の解釈—渋沢敬三の博物館構想
を杉本行雄、中道等が具現化

資料整理から見えてきたこと

民具の博物館に固執していたのは杉
本行雄と中道等

郷土研究の仲間の中で育まれた「古
代」「原始」への関心と「民具」へ
の関心

杉本行雄による「青森の民俗」の観
光資源化

→保存に向けて 研究者にできるこ
との限界

今日の「郷土人」による新たな意味
づけの必要

おわりに

「文化の資源化」の問題

活用主体の正当性と活用手段の妥当性

「文化財化」の問題—担い手から離れ
「みんなのもの」となる

...当事者の発言権の相対的な低下

当事者の多様性...「地域」は一枚岩
ではない

当事者の戦い方と第三者の
ふるまい方

当事者にしか分らない領域の尊重

*外部との接触による新たな「当事者」
の登場と育成